

知識・技能を活用・発揮し、主体的・協働的に取り組む音楽づくり ～五音音階に親しみ、日本やアジアの伝統音楽のよさを感じ取るために～

北川 真里菜

グローバル化社会が進む近年、我が国や郷土の伝統音楽に親しみ、よさを味わえるようにしていくこと、生活や社会における音や音楽の働きや音楽文化についての関心や理解を深めていくことがより一層求められている。学習指導要領においても、和楽器を含む我が国や郷土の音楽の学習の充実を図る必要性が示された。

本研究においては、日本やアジア諸国の伝統音楽で用いられた様々な「五音音階」を手掛かりに、和楽器（箏）を用いた都節音階の鑑賞・演奏・音楽づくり、全音音階をつかった楽曲の鑑賞・音楽づくりをとおして、伝統音楽に触れる機会の少ない子どもたちが我が国の伝統音楽や近隣のアジア諸国の音楽のよさを感じ取れるよう、知識・技能を活用・発揮させながら主体的・協働的に取り組める音楽づくりの工夫を試みた。

キーワード： 伝統音楽、和楽器、音楽づくり、五音音階、カリキュラム・マネジメント

1. 研究の目的

1. 1. 学習指導要領より

明治時代以降、日本の音楽教育では西洋音楽を土台とした教育が行われてきた。

しかし、平成 20 年の学習指導要領では「国際社会に生きる日本人としての自覚の育成が求められる中、我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を基盤として、我が国の音楽文化に愛着をもつとともに他国の音楽文化を尊重する態度等を養う観点から、学校や学年の段階に応じ、我が国や郷土の伝統音楽の指導が一層充実して行なわれるようにする。」と示された。

更に、平成 29 年度改訂の指導要領では、「我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わい、愛着をもつことができるよう工夫すること」と示され、我が国や郷土の伝統音楽の指導の充実が一層重視されている。

1. 2. 現代における子どもと伝統音楽

現代の子どもたちは、生活様式の変化などにより日常的に伝統音楽に触れる機会が少なくなっている。

ヤマハ音楽振興会が 2006 年に実施した音楽的思考に関する調査によれば、好きな音楽ジャンルは 20 ～ 40 代の若者を中心に「J-POP」に回答が集中、一方、嫌いな音楽ジャンルでは、すべての世代を通じて「純邦楽（雅楽等）」「日本民謡」といった日本の伝統音楽の回答が大きい割合を占めた。^{*1}

また、降矢美彌子（1982）は、マス・メディアにおける音楽の放送量において、クラシックやポップス、ジャズ、ロック、歌謡曲といった洋楽系音楽が 93% を占めるのに対し、「日本の音楽」は 7% にしか満たないことを指摘している。^{*2}

以上のように、日本で生活しているにも関わらず、

子どもにとって日本の伝統音楽は遠い存在であり、そのような音楽に触れる機会もなく、場合によっては苦手意識を抱いている可能性もあることがうかがえる。

そのような状況の子どもたちだからこそ、教師が一方的に知識・技能を与えるのではなく、子どもたち自身が主体的に仲間と協働しながら、知識・技能を得たり活用・発揮したりしながら伝統音楽のよさを感じ取らせたい。

1. 3. 学校教育における伝統音楽の指導

上記のような実態を踏まえ、現在各学校で和楽器などをつかった我が国や郷土の音楽の教材をつかった指導が行われている。

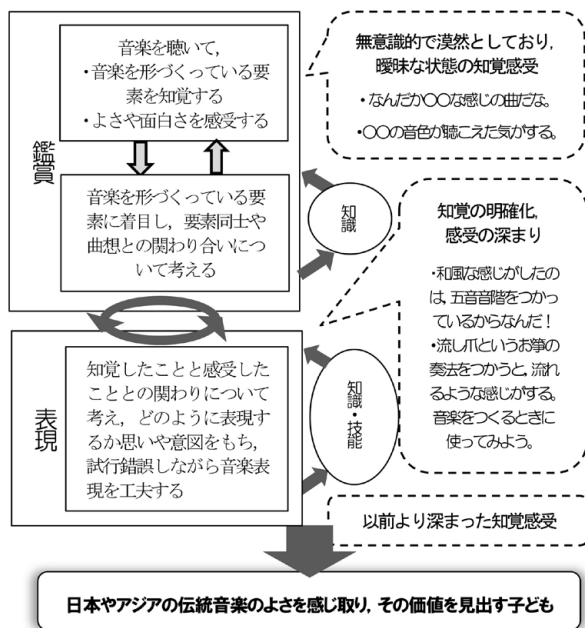
しかし、国立教育政策研究所による児童への質問紙調査では「音楽の学習をして、日本の音楽や地域の音楽に興味をもつようになりましたか。」という質問に対して肯定的な回答の割合は約 6 割にしか満たない。^{*3}

伝統音楽に関する実践は、これまで主に鑑賞や器楽分野で多く取り組まれている。

本研究においては、鑑賞・器楽・音楽づくりと 3 つの分野にわたって表現と鑑賞を関連付ける題材計画による実践を行う。伝統音楽を鑑賞したり実際に楽器を使って演奏したりしながらそのよさに親しむことに加え、新たに自分たちで音楽を「つくり出す」ことによってより主体的にその面白さや美しさを感じ取るところまで迫りたい。

1. 4. めざす子ども像

本研究においては、仲間と協働しながらこれまでに得た知識や技能を活用・発揮し、主体的に音楽をつくるなかで、日本やアジア諸国などでつかわれてきた五音音階に親しみ、日本やアジアの伝統音楽のよさを捉えなおし、その価値を見出す子どもの姿をめざす。



2. 研究仮説

知識・技能を活用・発揮し、主体的・協働的な音楽づくりを行うことで、五音音階に親しみ、日本やアジアの伝統音楽のよさを感じ取って、その価値を見出す子どもの姿が見られるであろう。

3. 研究内容·方法

本研究においては、本校第4学年で実施した下記の二つの題材より、(1)の題材における子どもの姿を中心に検証を行う。

- (1) 和楽器（箏）をつかった都節音階の楽曲の鑑賞・演奏・音楽づくり

「音のお・も・て・な・し ～五音音階をつかって、
外国の人に「和」のよさを伝えよう～」

- ## (2) 呂旋法の楽曲の鑑賞・演奏・音楽づくり

「海外を魅了した五音音階～日本やアジアの音楽」

二つの題材において、知識・技能を活用・発揮し、主体的・協働的な音楽づくりを行うために下記の点に留意して取り組んだ。

3. 1. 知識・技能の活用・発揮を促すために

指導要領では、「音楽づくりの発想を得たり、どのように音を音楽にしていくなかについて思いをもったりするためには、その過程で新たな知識や技能を習得することと、これまでに習得した知識や技能を活用することの両方が必要となる」*4 と記されている。音楽づくりだけでなくすべての領域において、思いや意図をもって表現したり曲全体を味わって聴いたりするために、知識・技能の習得だけでなく活用・発揮することの両方が必要であることが示されている。

3. 1. 1. カリキュラム・マネジメント

本研究においては、知識・技能の活用・発揮のために次のようなカリキュラムの工夫を行った。

- ① 前単元や前時までにて得た知識・技能が本単元及び本時での学びで活用・発揮されるよう、題材同時のつながりを意識した年間計画(図2)の作成と、活用・発揮させたい知識・技能の明確化(図3)

習 得	リズム の特徴 を感じ 取ろう	旋律 の特徴 を感じ 取ろう	曲の気 分を感じ 取ろう	弦楽器 の響き を感じ 取ろう	外国の人 とのこ のよさ を伝え よう	日本や アジア の音楽 に親し もう	旋律の 重なり を感じ 取ろう	打楽器 の響き を感じ 取ろう
音楽の 要素	リズム	旋律の 上がり 下がり や特徴	三拍形 式、合 いの手	音色	音色 音階	音階	旋律の 重なり	音色

図2 第4学年音楽科年間計画

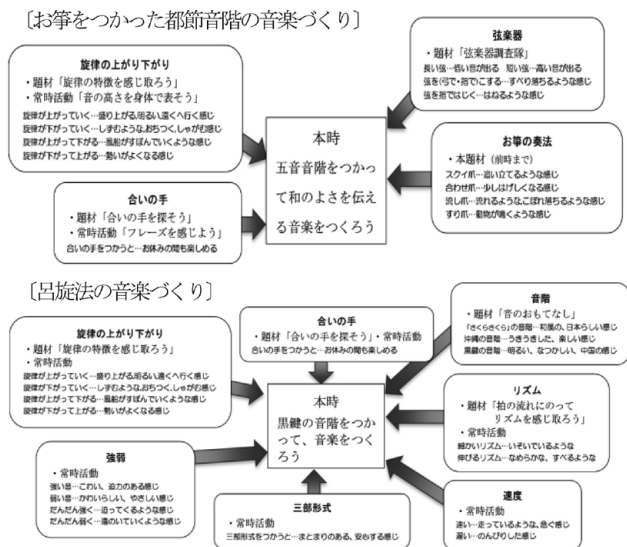
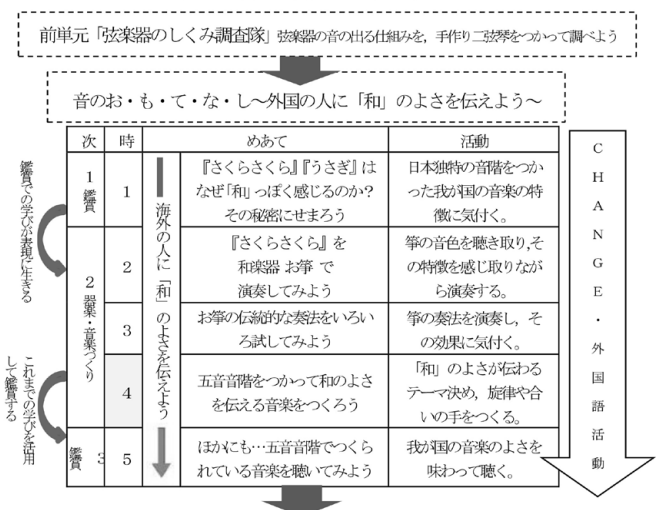
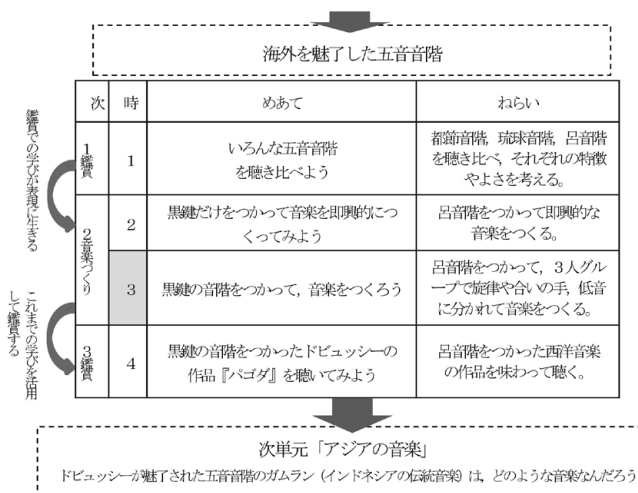


図3 音楽づくりで活用・発揮させたい知識・技能

- ② 同一単元において、前時までに得た知識・技能が
本時での学びで活用・発揮されるよう、鑑賞と表
現を往還する題材構成（表1）
- ③ 他教科での学びで得た知識・技能が音楽科での学
びで活用・発揮されるよう、教科横断のカリキュ
ラム・デザイン（表1）

表1 題材の流れとつながり





3. 1. 2. 教室掲示

前単元や前時までには得た知識・技能が本単元及び本時での学びで活用・発揮されるよう、次のような教室掲示を行った。

- ① これまでに学んだことを一覧にした、音楽の学びマップ（図4）
- ② これまでに学んだ音楽の要素とその働きに関する掲示（図5）

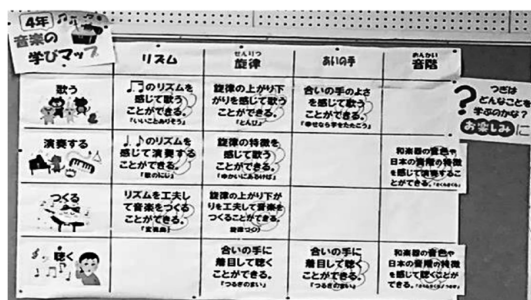


図4 音楽の学びマップ（4年生）



図5 音楽を形づくっている要素とその働きに関する掲示

3. 2. 主体性・協働性を引き出すために

子どもが主体的に音楽づくりに取り組めるよう、下記の点を工夫した。

- ① 題材のゴールを見通すための、他教科と関連させた単元を貫くめあての設定（表1）
- ② 「つくりたい」思いを醸成するための、即興的な音楽づくりの時間の確保や、教師がつくった音楽の共有
- ③ 自己の学びを調整するための、振り返りの観点の提示（図6）

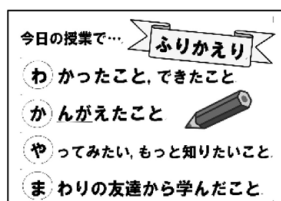


図6 振り返りの観点

仲間と協働的に音楽づくりに取り組めるよう、下記の点を工夫した。

- ① ペアやグループで1台（面）の楽器を使用し、「旋律」「合いの手」などの役割の設定
- ② 互いの表現を認め合い表現の幅を広げるための、つくる過程での他のペアやグループの作品の共有・価値付け

4. 授業の実際

4. 1. 「音のおもてなし」におけるお箏をつかった都節音階の音楽づくり

第1時で初めて『さくらさくら』『うさぎ』を鑑賞した際は、「何この曲…古い」「怖い、不気味だ」など、日本の音楽を肯定的に受け止めている子どもは極めて少なかった。

しかし、教師の「つかわれている音にしるしをつけてみて」という指示に対して、2つの楽曲が5つの音だけでできている五音階でできていることを知ったのをきっかけに、一気に学習意欲が増した。

第2時には、箏（3面）とタブレットのバーチャル箏アプリの両方をつかって『さくらさくら』を演奏し、その後、都節音階をつかった「和のよさをつたえる」音楽を2人組でつくる音楽づくりの活動に入った。箏は、1面を両側から2人で使い、「旋律」と「合いの手」に分かれてペアでひとつの音楽をつくった。

箏の音色に魅了され、どの子も意欲的に音楽づくりに取り組む姿が見られた（図7）。



図7 授業の様子



図8 教室掲示

また、音楽づくりの後、当初は予定していなかったゲストティーチャーに来ていただき、つくった音楽を演奏する際の箏の所作や作法について教えていただいた。



図9 ゲストティーチャーに教わる姿

子供たちの「外国の人に和のよさを伝えたい」という思いが一層強くなった(図10)ことから、子どもの様子や実態から常にカリキュラムを見直し、マネジメントしていくことの大切さを感じた。

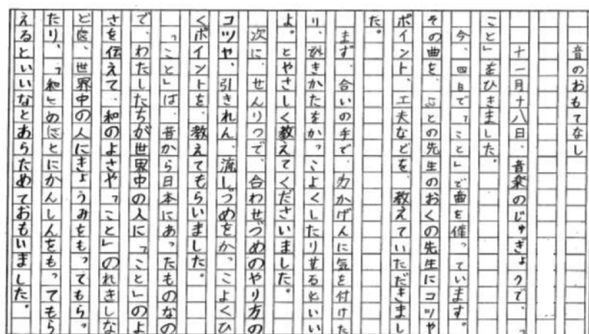


図10 ゲストティーチャーへのお手紙

4. 2. 「海外を魅了した五音音階」における呂旋法の音楽づくり

前単元「音のおもてなし」で学んだ都節音階と、他の様々な五音音階とを比べることで、それぞれのよさや面白さを感じ取ることができた(図11)。

音楽づくりでは、後にインドネシアの伝統音楽ガムランを学習することを意識し、木琴をつかって「旋律」



図11 音階の感じ

「合いの手」「低音」に分かれ3人グループで学習を進めた。自分たちの音を何度も聴き、調整・改善をしながら、イメージする表現に近づけようと意欲的に取り組むことができた(図12)。



図12 授業の様子

5. 授業の考察

5. 1. 知識・技能を活用・発揮できたか

題材終了後のアンケート(4年B組 29人対象)では、学んだことをつかって音楽づくりに取り組めたと答えた子どもは93%であった(表2)。

表2: 子どもへのアンケートより

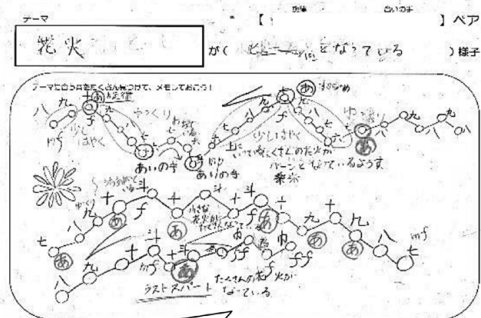
「音楽をつくるときに、今まで学んだことがつかえましたか。」

つかえた 27人

あまりつかえなかった: 2人

つかえなかった: 0人

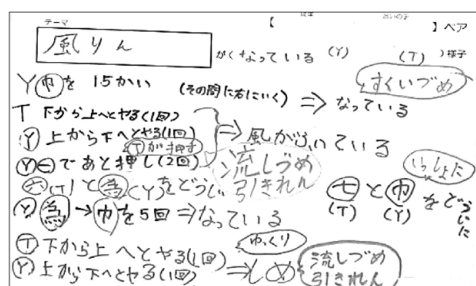
子どものつくった作品I(図13)では、①速度、②旋律の上がり下がり、③箏の奏法、④強弱の働きに関する知識を活用してつくられている。



私たちのテーマは、花火がヒュー、パンツとなっている子です。①ヒューのところは少しはやくあがる感じで、②低いところから高い音。そのあとゆっくりおちて、りょうへいくん(合いの手)が③合わせ爪でパンツという音を出します。④どんどんたくさんの花火がなってきた、ラストスパークはだんだん強くします。

図13 子どもの作品I

作品Ⅱ（図14）では、①リズム、②お箏の奏法、③旋律の上がり下がり の働きに関する知識を活用して つけられている。



C: ぼくたちは、風鈴が鳴っている様子をつくりました。
①風の強い時は15回、弱い時は5回、②スクイ爪
でやって、鳴っている様子をだしました。
T: 「上から下へ」 っていうところは、どんな様子？
C: そこは、風が吹いている。③高い音から低い音へいっ
たり、逆になったりして風がビューンって吹いている
感じのところですよ。

図14 子どもの作品Ⅱ

「海外を魅了した五音音階」における音楽づくりでは、作品Ⅲ（図15）のように、①リズム、②強弱 など、様々な音楽の要素とその働きに関する知識を活用してつくられた。

作品Ⅲでは、子どもが無意識につかっていた♪（タッタ）のリズムを、波線部のような問いかけをすることでリズムとその働きに目を向けさせ、学びを活用したことを自覚させていった。

C: 僕らの班は、最初にゆうがに踊っていて、Bで激しく踊って、またAに戻って、ゆうがに踊る様子です。
T: 何のリズムをつかったの。
C: Aはタッタ。Bはタッタじゃなくなって、またAでタッタのリズムです。
T: なんでタッタをつかったの。
C: ①タッタをつかったら、楽しく踊る感じになるから。

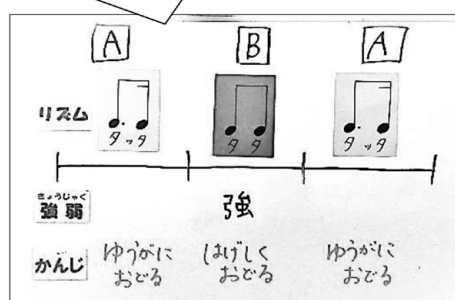


図15 子どもの作品Ⅲ

教師が意図的にカリキュラム・マネジメントを行うことが、このような知識・技能の活用・発揮につながることが明らかになった。

例えば、合いの手に関する学習を前題材までに組み込んだことで、音楽づくりにおいて「合いの手を入れ

てみよう」という教師の指示に対して、誰一人として迷うことなく合いの手を入れることができた。それは、前題材までの学びで「合いの手」に関する知識・技能がきっちりと習得されていたことが、本時において見取れた瞬間であった。

また、本時において活用することによって「やっぱり、合いの手があるほうがまとまるなあ。」という子どもの発言に見られるように、新たにその知識が更新されていく場面も見られた。

また、教室掲示としてこれまでの学びを可視化したことも効果的であった。音楽をつくる際、子どもたちが、図16のよう



あや：流れる感じを出すにはどうしたらいい。
しょう：これを見たらわかる。流し爪は、流れ落ちていく
ような感じがするんやった。流し爪や。
あや：やってみよう。

図16 お箏の奏法とその働きに関する掲示を確かめる子ども

5. 2. 主体的・協働的に取り組めたか

表3 子どもへのアンケートより

「音楽づくりの授業に、楽しく意欲的に取り組みましたか。」

とても意欲的に取り組みた	意欲的に取り組みた
16人	13人

あまり意欲的ではなかった：0人

「ペアで協力して音楽をつくれましたか。」

とても協力できた	協力できた
16人	12人

あまりできなかった：1人

できなかった：0人

アンケートでは概ね肯定的な回答が多かった。

「音のおもてなし」では、楽しく意欲的に取り組めた理由やきっかけとして、子どもから次の項目が上位に挙げられた（表4、図17）。

表4：子どもへのアンケートより

「どの活動が、勉強になり楽しかったですか。」（複数回答可）

活動	人数
本物のお箏で演奏したこと	21
日本の音楽を聴いて、五音音階でできていることを知ったこと	20
自分たちで、お箏をつかった音楽をつくったこと	20
お箏の専門の先生に来てもらったこと	17
iPadのお箏で演奏したこと	15

本物の音を聞いてみたいことがあったのだから、
たし、おこで曲を作ったことが「べんきょう」にな
りました。

「ソ、シ、レ」が「たし」とで、ひっくり返す。
あらためて「和」のよさを感じた。

図17 自由記述欄より

本物の楽器に触れることの大切さを改めて感じると
ともに、「日本の音楽が五音音階でできていることを知
ったこと」の項目も人数が多く、子どもにとっては得
体のしれないものであったであろう日本の音楽を、音
階という視点で読み解いていったことが意欲づけにも
つながったことがわかった。

また「自分たちで、お箏をつかった音楽をつくった
こと」により、既存の楽曲を演奏するだけでなく更に
自由な発想で都節音階の音楽を「つくりだせた」こと
に喜びを感じている子どもが多かった。

また、タブレットのバーチャル箏アプリの活用は、
学校現場の楽器数の少なさを解決するだけでなく、ど
の子にとっても容易に演奏に取り組みやすい手立てと
しても効果的であった。

また、協働的な音楽づくりの実現のため、ペアやグ
ループで1台(面)の楽器を使用し、「旋律」「合いの
手」などの役割の設定したことは、子どもたちにとつ
て協働的に取り組む必要性を感じさせるものであり、
その有用性が明らかとなった。

5. 3. 五音音階に親しみ、日本やアジアの音楽 のよさを感じ取ることができたか

表5：子どもへのアンケートより

「日本の音楽や音階について、授業前と比べて好きになりましたか。」	
とても好きになった 14人	好きになった 13人

変わらない：2人

あまり好きではない：0人

アンケートでは、「好きになった」と答えたのは全体
の93%となった。「好きではない」という回答は0%
である。

図18は、日本の音楽に対するイメージや思いにつ
いての自由記述である。日本やアジアの伝統音楽に対
して「知らない」「興味がない」「よくわからない」と
いうようなイメージをもっていたようだが、本実践を
終えて子供たちの中でそのイメージや思いに変容があ
ったことがわかる。

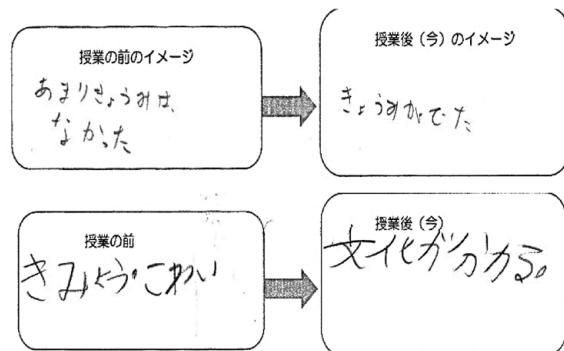
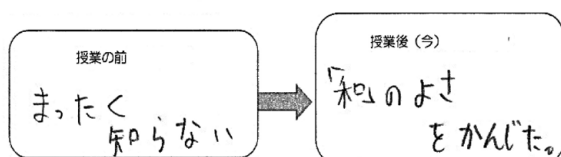


図18 日本の音楽に対するイメージや思いの変容について

6. 成果と課題

本研究では、知識・技能を活用・発揮するためのカ
リキュラム・マネジメントや教室掲示の工夫、主体的・
協働的な音楽づくりを促す授業のしかけを試みること
で、日本やアジアの伝統音楽のよさを感じ取り、その
価値を見出す子どもの育成につなげることができた。

実践をととして、「五音音階」に着目した日本の音楽
の鑑賞が、その後の子どもたちの表現意欲を高めるこ
とが子どもたちの姿から明らかとなった。このように、
何気なく聴いていたたり、または苦手意識をもってい
たりする音楽も、その構造に迫り、知覚を明確化してい
くことで、知覚したことと感受したこととの関わりに
ついて考え、表現へと生かしていくことが大切である
と感じた。

今後も、我が国の音楽文化に愛着をもつとともに他
国の音楽文化を尊重し、我が国や郷土の音楽や諸外国
の音楽のよさや面白さを感じ取れるよう、指導法や教
材化について更に研究を深めていきたい。

参考文献

- 文部科学省(2018)「小学校学習指導要領解説音楽編」
坪能克裕(2012)「音楽づくりの授業アイデア集
音楽をつくる・音楽を聴く」、音楽之友社

引用文献

- *1 財団法人ヤマハ音楽振興会 音楽研究所(2006)
「音楽ライフスタイル Web アンケート報告書」
https://www.yamaha-mf.or.jp/onken/wp-content/themes/onken/shared/pdf/report/rpt001_lifestyle2006.pdf
*2 降矢美彌子(1982)「音楽教育における「日本の音
楽」に関する諸問題 ―日本の音楽教育の根本的な転
換をめざして―」、『福島大学教育実践研究紀要』P71
*3 国立教育政策研究所教育課程研究センター
平成24年度学習指導要領実施状況 質問紙調査
(小学校音楽)
*4 文部科学省(2018)「小学校学習指導要領解説音楽
編」P43